

〔費孝通先生追想特集〕

## 費孝通先生を偲ぶ

In Memory of the Late Professor FEI Xiaotong

周 星

ZHOU Xing

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: zhouxing@vega.aichi-u.ac.jp*

北京大学の高丙中教授からメールが届いた。費孝通先生が2005年4月24日22時38分、北京の病院で永眠なされたという悲しいお知らせだった。享年95歳。先生の御霊前に献花し、追悼式にも参列したかったが、仕事などの関係で行けなかった。遙かな異国でご冥福を祈りながら、先生の優しいお姿を心の中に浮かべている。

費孝通先生は社会学者、人類学者、社会活動家としてよく知られていた。先生は1985年北京大學社会学人類学研究所を創立し、初代所長を務めた。1989-2000年の11年間、同研究所に勤めてきた私は、先生の授業や講演会を聴講したり、お宅のセミナーに伺ったり、また、先生がリードした研究プロジェクトに参加させていただいたり、先生の現地調査にも同行したりするチャンスにも度々恵まれたことがあるので、学者としての費孝通先生を少し理解ができると思う。

費孝通先生は1910年江蘇省呉江県に生まれた。1933年燕京大学社会学部を卒業。当時、機能主義理論によるコミュニティ・スタディを提唱した呉文藻教授、燕京大学へ招聘されてきたシカゴ社会学派のR・パーク教授やイギリスの機能主義者ラドクリフ＝ブラウンなどの影響を費孝通先生は受けて、実証的な現地調査の必要性を理解することとなった。1935年、先生は清華大学大学院を社会人類学修士第一号として卒業し、国費海外留学の資格を得た。留学前に結婚し、奥さんの王同恵と一緒に廣西省の大瑤山でフィールドワー

クをした際に、意外な事故で先生は怪我、奥さんが洪水に流されて死亡。傷心を癒す目的で呉江の「江村」にて休養しながらも、現地調査をした後、先生は1936年渡英。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに留学し、高名な人類学者B・マリノフスキーやR・ファースらに直接指導を受け、「江村」の調査に基づいて、『江村経済—中国の農民生活—』という博士論文で、一躍、国際的に注目を集めた。1938年帰国、雲南大学、西南連合大学で教鞭をとるが、先生は昆明郊外において戦時中の劣悪であった研究条件の中で農村調査に続けて従事し、農村の土地問題を機能主義で分析し、社会学の方法論に歴史的視点を導入することによって、その後のコミュニティ研究に多大な貢献をなした。1943年先生はアメリカ政府の招聘教授として訪米、帰国後に清華大学教授となった。

費孝通先生は1950年代の初めに雲南省少数民族地区の社会調査を指導したが、1957年の「反右派闘争」では批判され、その後の「文革」も含め、約20年間、研究活動が殆ど出来なかった。1978年中国社会科学院に復帰、民族研究所副所長を経て社会学研究所長に就任した後、先生は長年の空白を埋め、自ら理論的、実証的な学術研究に日夜従事するだけでなく、後進の指導に当たるとともに、中国における社会学と人類学の復活と一層の発展のためにも懸命に努力し、大きな研究業績をなした。

柳田國男先生の「学問救世」と同じように、費孝通先生の学問が目指したのは、「志在富民」（貧しい国民を豊かにするため）であり、その学問の性格も応用的である。つまり、社会学者としての先生は、単に社会事象の分析及び理論化に取り組むばかりでなく、むしろ、自分の調査と研究に基づいて、中国国内における農村問題、格差問題、人口問題、少数民族問題、西部大開発問題に関する諸問題など、現代中国が抱えている極めて現実的な社会・文化問題の解決に、学問の立場から貢献しようとしてきた。例えば、先生は江蘇省南部に於ける「郷鎮企業」を中心とした農村工業化の「蘇南モデル」を提示し、中国各地で現地調査を通じて、幾つか内発的な経済発展のモデルもまとめた。先生が考案した「小城鎮理論」は、農民が離農しても離郷せずという形で、郷鎮企業による農村の経済発展に伴う小規模都市を形成することによって大都市への人口集中を抑制し、過剰労働力を非農業部門に転移させようというものである。それは政府の政策形成に与える影響は大きいし、また、産業と就業の構造転換による農村問題の解決を可能にしたとも言える。

費孝通先生は中国社会学・人類学の巨人であり、その著作には *Peasant Life in China* (1939, すなわち『江村経済』), *Earthbound China* (1945), 『生育制度』 (1947), 『郷土中国』 (1948), 『郷土重建』 (1948), *Chinese Gentry* (1953), 『民族與社会』 (1981), *Toward People's Anthropology* (1981), *Chinese Village Close-up* (1983), 『小城鎮四記』 (1985), *Small Towns in China* (1986), 『辺区開発與社会調査』 (1987), 『民族研究文集』 (1988), 『中華民族多元一体格局』 (1989), 『行行重行行—郷鎮發展論述—』 (1992), 『学術自述與反思』 (1996), 『費孝通文集』 (1-15卷, 1999) など、数多くある。先生の業績は国際的に

も高く評価されている。1980年に国際応用人類学会よりマリノウスキー名誉賞を受けた後、1981年イギリス王立人類学協会のハクスレー記念賞、1988年アメリカの大英百科全書知識普及功労賞、1999年中国政府の国家社会科学基金項目特別名誉賞を、また、1993年に福岡アジア文化賞の「大賞」、1994年にアジアのノーベル賞と呼ばれるフィリピン・マグサイサイ賞をそれぞれ受賞。費孝通先生の学問の影響は国境を越えたものであった。先生は正に福岡アジア文化賞の受賞の理由のように、「アジアを代表する社会学・人類学者。中国の伝統文化に基づいた視点から独自の的方法論により、中国社会を多面的に分析、その研究は広く、人文・社会科学に指導的な影響を与えて、アジア研究に多大な貢献をなした」方であり、その業績は「中国の社会学・人類学の発展に大きな貢献を果たしたばかりでなく、アジア文化とその研究の意義を広く世界に示したと評価できる。」ものである。

晩年の費孝通先生は、中国の「文化自覚」（文化を自覚すること）を提唱し、人類にとって「求同存異」（差異を認め、和を求める）という思想が世界の多元文化が必ず通らなければならない道と説く。異なる文化を持つ人々が同じ世界で生活するには、必ず平和共存を実現しなければならず、実現できない場合には多くの問題が噴出し、紛争を引き起こすこともあると先生は指摘した。香港の「一国両制」についても、その政治的意義ばかりでなく、異なる政治体制・社会制度が一つの国で相容れられたことに、その「文化的意義がある」と述べた。

日本でも費孝通先生の理論や著書は多く紹介されている。現在費孝通先生についての和訳は、『支那の農民生活：楊子江流域における田園生活の実態調査』（仙波泰雄・塩谷安夫訳、生活社、1942）、『中国農村の細密画：ある村の記録1936～82』（小島晋治ほか訳、研文出版、1985）、『生育制度—中国の家族と社会—』（横山廣子訳、東京大学出版会、1985）、『江南農村の工業化—“小城鎮”建設の記録1983～84』（大里浩秋・並木頼寿翻訳、研文出版、1988）、『中国の青年・中年・老年—その生活意識調査報告—』（加々美光行監訳、蒼蒼社、1987）などがある。日本の学界において、内発的発展論の原型として、費孝通を柳田国男との比較をする学者がいれば、費孝通研究に取り組む学者もいる。最近、佐々木衛著『費孝通—民族自省の社会学』（東信堂、2003）が出版され、「費孝通年譜」、「費孝通主要著作」、「費孝通に関する研究書及び翻訳書」などを含め、中国社会学・人類学の推進者である費孝通先生の理論と実践を包括的に論考し、中国社会を解明する先生独自の概念・思想と研究技法を浮き彫りにするもので、読む価値があると思う。

国の指導者でもあった費孝通先生は、実際とても親しみやすい、ユーモアのある先生であり、講義と著作の内容も分かりやすいものである。田舎の農民も読め、分かるように配慮がなされているので、中国においては、先生の著書と論文は遥かに学問の世界を越えて愛読されている。それも費孝通先生の魅力だと思う。費孝通先生の研究には、中国社会の具体的な現実を実証的に分析したものがあれば、社会構造に関する全体的な把握を中国文

化の観念から理論的に構築したものもある。現代中国を学問的に知るために、費孝通先生は避けられない存在である。先生が残してきた豊かな学問の遺産を大切に、中国研究に取り組むのは、我々後輩にとっては、まさに先生の打ち立てられた金字塔を永遠に仰ぎ見て、教えを受け続けることではないかと思う。

2005年5月7日